

令和7年度第2回岡山市総合教育会議

日 時：令和7年8月22日（金）

午後3時30分～

場 所：岡山市役所本庁舎3階 第3会議室

会 議 次 第

1 開 会

2 協議事項

第3期岡山市教育大綱の方向性について

3 閉 会

< 協議テーマと会議資料について >

1 教育大綱策定の目的と意義

2 第3期岡山市教育大綱（次期大綱）の方向性について

資料① 教育大綱は何のためにあるのか

資料② 第1回総合教育会議（5/22）のまとめ

資料③ 次期大綱の方向性 ～ 継承と更新 その1 ～（案）

資料④ 次期大綱の方向性 ～ 継承と更新 その2 ～（案）

< ご意見をいただきたいこと >

○ 子どもたちに必要な「もの(力など)」は何か

○ どんな教育が必要か

○ 具体的な取り組みのアイデアについて

教育大綱は何のためにあるのか

市長は、民意を代表する立場であり、教育委員の任命や教育委員会の所管事項に関する予算の編成・執行、条例提案などの権限を有している。また、近年の教育行政においては、福祉や地域振興などの一般行政との連携が必要となっている。これらのことを踏まえ、市長が大綱を策定することは、教育、学術及び文化振興に関する施策に市民の意向を一層反映し、総合的にそれらの施策を推進することを目的としている。

また、教育委員会や学校にとっては、大綱に市全体の教育に関する目標や重点取組を掲げることで、教育委員会と教職員が同じ方向を向き、一体となって、目標達成に向けた取組をより強力に進めることができる。

取組を浸透させるためには

【教育大綱策定におけるコンセプト】

- ☐ シンプルでわかりやすい
- ☐ 具体的で取り組みやすい
- ☐ 取組の成果が見えやすい

これからの岡山市の子どもたちに必要な教育

主な意見・キーワードからのイメージ

仲間と協働して
課題を解決する

見て、聞いて、触れる
直接的な体験活動

探究的な学びの拡充

生活の中から問いを見だし、課題を立て、情報を集め、整理・分析してまとめ・表現する

「ひと・もの・こと」
とのつながり

- ・地域や社会を知る
- ・自然や歴史・文化を知る
- ・企業の魅力を知る

基礎的な学力
を身に付ける

地域社会のために
何かしてみたい

失敗しても
粘り強く取り組む

興味関心のあること
をとことん学ぶ

子どもが育つには、地域社会の力も必要だから

コミュニティ・スクールの
仕組みを活用

地域資源の活用

学びを変えるには、子どもへのまなざしを変える必要があるから

教員の意識改革・若手教員の育成

子どもの成長の様子

キーワードからのイメージ

人格の完成

アイデンティティの確立

社会的自立

社会参画・社会貢献

シビックプライド

義務教育
段階

地域社会を形成していく
自覚や意識をもつ

夢や目標をもつ 地域や自分に誇り
をもつ

地域を知り、好きになる

他者を認める 自分自身を知る

自分にはよいところがある
と思う

他者から認められる

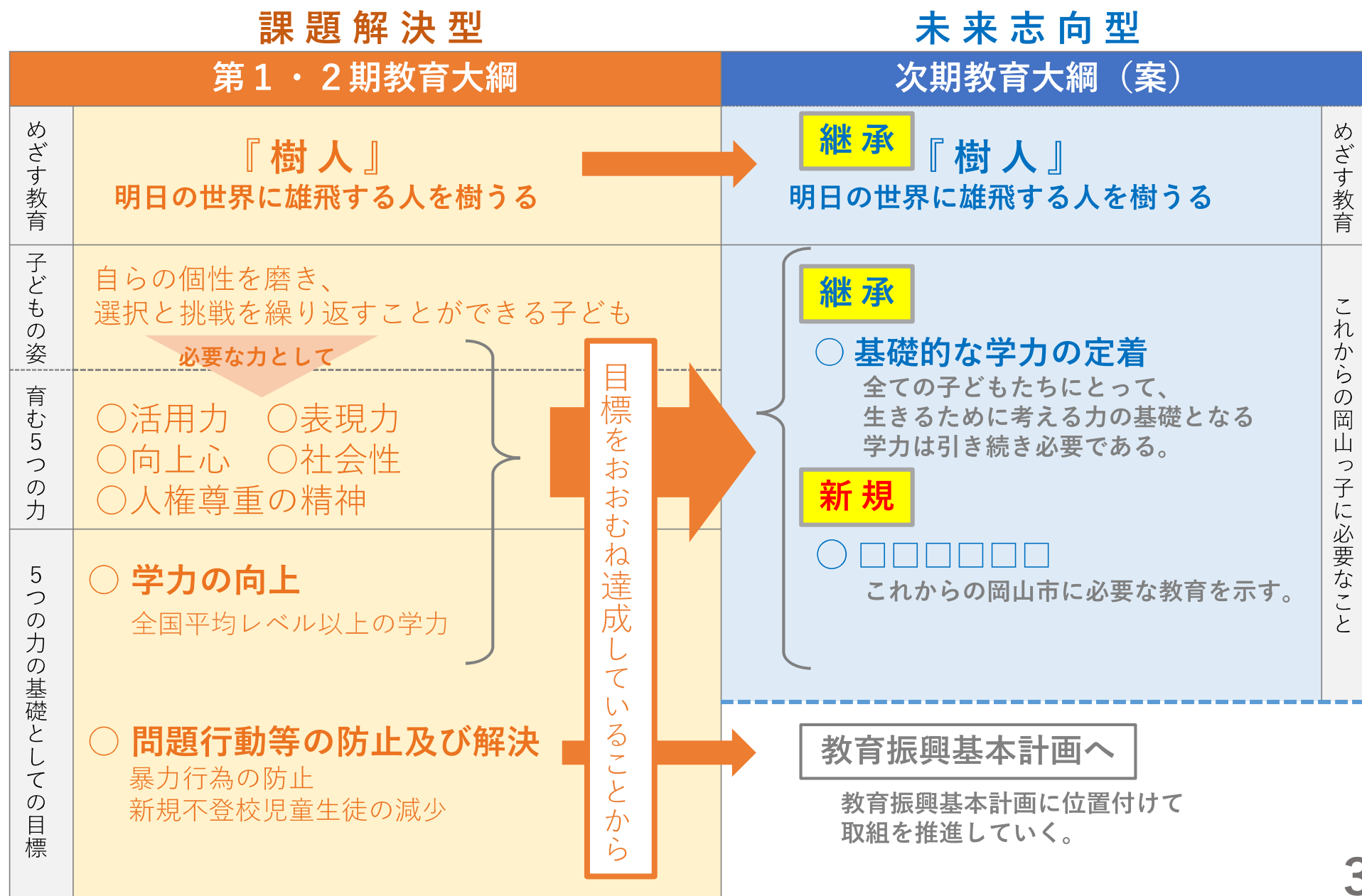
家族に愛される

発達段階に合わせて学習する

2 第3期岡山市教育大綱（次期大綱）の方向性について

次期大綱の方向性 ～ 継承と更新 その1～（案）

資料③



2 第3期岡山市教育大綱（次期大綱）の方向性について

次期大綱の方向性 ～ 継承と更新 その2 ～（案）

資料④

第1・2期教育大綱

○ 学力の向上

- ◆ 学力調査の結果分析を踏まえた授業改善
- ◆ 校長による授業参観と助言
- ◆ 教員の資質向上のための研修

→（活用力・表現力）

授業改善に向けた取組を組織的に進めた結果、**おおむね基礎的な学力は身に付いた。**

→（向上心・社会性・人権尊重）

自己肯定感が高く、規範意識や思いやりの心は育っているが、**自ら行動に移すこと（実践力）に課題**がある。

○ 問題行動等の防止 および解決

- ◆ 早期の個別支援計画の作成（欠席10日で作成）
- ◆ 研修会やケース会などの組織的な取組

→ 問題行動等の未然防止や早期解決に向けて、学校全体での組織的な取組が進んだ結果、問題行動は落ち着き、**新規不登校児童生徒の出現率は緩やかな増加にとどまった。**

第4期教育振興基本計画
（次期計画）に位置付ける

これからの岡山っ子に必要なもの

継承

○ 考える力の基礎となる学力

生涯にわたって学び続けるために必要な考える力の基礎となる学力。（資質・能力）

新規

○ 地域や社会とつながり、貢献 しようという心

つながりや達成などからもたらされる自己肯定感を基盤として、社会のために何かしてみたいと思う心。

自己実現
夢や目標をもつ
自己肯定感

社会貢献意識
協働性
地域への愛着・誇り

国の教育振興基本計画・時代の潮流

【国の計画のコンセプト】

- ◆ 持続可能な社会の創り手の育成
- ◆ 日本社会に根差したウェルビーイングの向上

【社会の現状と変化】

- ・ 将来の予測が困難な時代（VUCA）
- ・ 少子化、人口減少、高齢化
- ・ 地球規模課題（資源、気候など）
- ・ 低い労働生産性、学ばない社会人
- ・ デジタル技術の急速な発展
- ・ 多様な価値観

第3期教育大綱

継承

○ 基礎的な学力の定着

生涯にわたって学び続けるために必要な考える力の基礎となる学力（資質・能力）を保障する。

授業改善（ICT活用含む）

授業研究の仕組み・体制づくり

新規

○ 岡山市への愛着と誇りの醸成

子どもが、地域の自然や歴史、文化などの魅力を知り、愛着や誇り持つことで、地域や社会と自分との関わりから自分の役割や生き方について考える教育を推進する。

おかやまの自然や歴史、文化などを学ぶ機会の創出

自分の生き方を考える
キャリア教育の推進



これからの学びを推進するために

新規

○ 教員の指導力・授業力の向上

教員が様々な見方や考え方に触れることを通して、学級経営や授業展開ができる資質を磨く必要がある。

若手教員の育成

企業や大学と連携した研修

参考資料

- ◇教育大綱と教育振興基本計画について …参考資料①
- ◇第1回総合教育会議（5月22日）のまとめ（協議1） …参考資料②－1
- ◇第1回総合教育会議（5月22日）のまとめ（協議2） …参考資料②－2
- ◇岡山市子どものアンケート調査（2月実施）の結果 …参考資料③
- ◇日本の子どもの現状と課題 経済産業省「未来人材ビジョン（令和4年5月）」一部抜粋・改変
…参考資料④－1、2、3、4

○ 教育大綱

総務局所管

- ・ 教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針。
- ・ 総合教育会議で協議し、市長が策定する。

○ 教育振興基本計画

教育委員会事務局所管

- ・ 教育の振興のための施策に関する基本的な計画。
- ・ 国の教育振興基本計画を参酌し、地域の実情に応じて教育委員会が策定する。

【参考】関係法令等

■ 教育基本法

（教育振興基本計画）

第十七条 政府は、教育の振興に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、教育の振興に関する施策についての基本的な方針及び講ずべき施策その他必要な事項について、基本的な計画を定め、これを国会に報告するとともに、公表しなければならない。

2 地方公共団体は、前項の計画を参酌し、その地域の実情に応じ、当該地方公共団体における教育の振興のための施策に関する基本的な計画を定めるよう努めなければならない。

■ 地方教育行政の組織及び運営に関する法律

（大綱の策定）

第一条の三 地方公共団体の長は、教育基本法第十七条第一項に規定する基本的な方針を参酌し、その地域の実情に応じ、当該地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱（以下単に「大綱」という。）を定めるものとする。

2 地方公共団体の長は、大綱を定め、又はこれを変更しようとするときは、あらかじめ、次条第一項の総合教育会議において協議するものとする。

3 略

4 略

協議1 データから見る岡山市の子どもの現状や課題の要因について(主な意見)

【自己肯定感が高いことについて】

- ・「子どもを褒めること」など目標を掲げ、教職員がそれを共有して取り組んだ成果である。
- ・一人一人を伸ばす教育をしてきた結果が、自己肯定感の高さや不登校児童生徒の増加率を緩やかなものとしている。

【他者との関わりに関する数値が低いこと、実践力が十分でないことについて】

- ・岡山はそこまで競争しないのでよい（地域性）から積極的な一步を踏み出せないのではないか。
- ・実践力を高めるには、学ぶ環境が影響するため、ソーシャルキャピタルを意図的に活用することを先生方が意識する必要がある。
- ・体験的な学習を通して実践力を高めることができるのではないか。
- ・失敗しても、粘り強く取り組む力が欠けている。

【夢や目標に関することについて】

- ・地域に誇りをもつことは、夢や目標をもつことにつながるのではないか。シビックプライドなども醸成されるのでは。
- ・地域に誇りをもつには、地元の魅力を知り、好きになる（愛着をもつ）ことが大事。
- ・岡山は温暖で自然災害も少ない。地域のために何かしなければ（社会貢献）という感覚が薄い。
- ・教職員が意識を変える必要がある。教職員の意識が変われば、子どもの学びが変わる。
- ・岡山で育ったということを糧にアイデンティティを確立した子どもになってほしい。

【メディアコントロールについて】

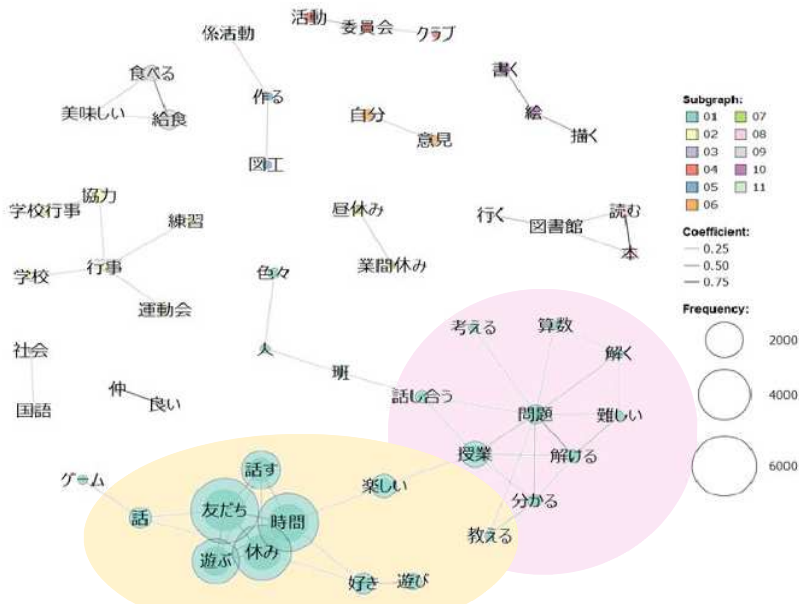
- ・家庭の意識改革が必要。
- ・子どもに対する「厳しさ」がないのではないか。
- ・保護者と子どもが一緒に考えることが重要。
- ・帰宅してからの時間の使い方について調査してみるのはいかがでしょうか。

協議2 これからの岡山市に必要な教育について（主な意見）

- ・興味関心をもって目標を立てて進めていく学習をさらに充実させるのはどうか。
- ・「探究」を充実させるのはどうか。先生が、子ども一人一人の学びをコントロールするのではなく、先生と子どもが一緒にやっていくという意識が良いのではないか。
- ・子どもが自分事で考えることが重要。トライアンドエラーでよい。岡山市はこの感覚が弱い。
- ・「探究」を進める際には、まずは子どもにインプットを行うことも大事。そのため、理解するにはある程度の学力は必要。
- ・地域社会を形成していくという意識付けをする教育。
- ・岡山がトップランナーだと感じるコミュニティ・スクールの仕組みを生かす。
- ・子どもたちが将来、岡山市外で活躍しながらも「やっぱり岡山市はいいね」と誇りをもって生きていけるよう、アイデンティティを確立するためにも、岡山を改めて知ることを通して自分自身を知ってほしい。
- ・ソーシャルキャピタルを意図的に活用した教育活動が必要。
- ・地域の企業の魅力を知って誇りをもつこと。
- ・地域に誇りをもつことは、夢や目標をもつことにつながるのではないかと。シビックプライドなども醸成されるのでは。
- ・社会参画や地域貢献が大事。そのためには、地域を好きにならないといけない。好きなものは大事にする。歴史上の人物でも文化でも芸術でも自然でも魅力が子どもが触れて知るという教育を進める。
- ・持続可能な社会の創り手を育成しなければならない。そのためには多様性に対応しなければならない。子どもの想いは一様ではない。
- ・直接的な体験活動を通して学ぶことが重要。
- ・社会貢献、社会的自立を目指したい。
- ・感謝の気持ちがもてる教育。
- ・目指す子どもを育成するために、まずは教員の意識改革が必要。

対 象：岡山市立小学校第5学年～岡山市立中学校第3学年（有効回収数 23,411件）
方 法：学習者用端末を使い、オンラインで回答

学校生活の楽しさ



【学校生活が楽しいと回答した小学生の記述分析】

左の図から、学校生活の楽しさに最も寄与しているのは、「**友だち**」と「**休み時間**」に「**遊ぶ**」や「**話す**」ことである。

また、「**授業**」というワードが「**分かる**」や「**教える**」といった学習行動と関連しており、理解が深まることに楽しさを感じる傾向が見られる。（この傾向は、中学生も同様）

友だちとの関わり

授業が分かる

先生に望むこと

	肯定的回答
分かりやすい授業をすること	98.6 %
学校行事でいっしょにもり上がること	96.0 %
がんばったことをみとめること	94.8 %
「いけないことはいけない」と指導すること	90.1 %
勉強や進路について、相談にのること	88.4 %
休み時間に一緒に遊んだり、話をしたりすること	84.8 %
友だち関係について、悩みや困ったことの相談にのること	71.4 %

「**授業**」「**教員の積極的な関わり**」「**集団の規律**」に関する内容の割合が高い。

どの質問においても数値が高く、教員への期待の大きさが表れている。

教員の指導力・授業力の向上

OECD加盟国中、日本の15歳の数学的・科学的リテラシーはトップレベル。
日本の子どもは、未来を切り拓く素晴らしい可能性を秘めている。

数学的リテラシーのランキング

順位	国 名	平均得点
1	日本	536
2	韓国	527
3	エストニア	510
4	スイス	508
5	カナダ	497
6	オランダ	493
7	アイルランド	492
8	ベルギー	489
9	デンマーク	489
10	イギリス	489
	OECD平均	472

科学的リテラシーのランキング

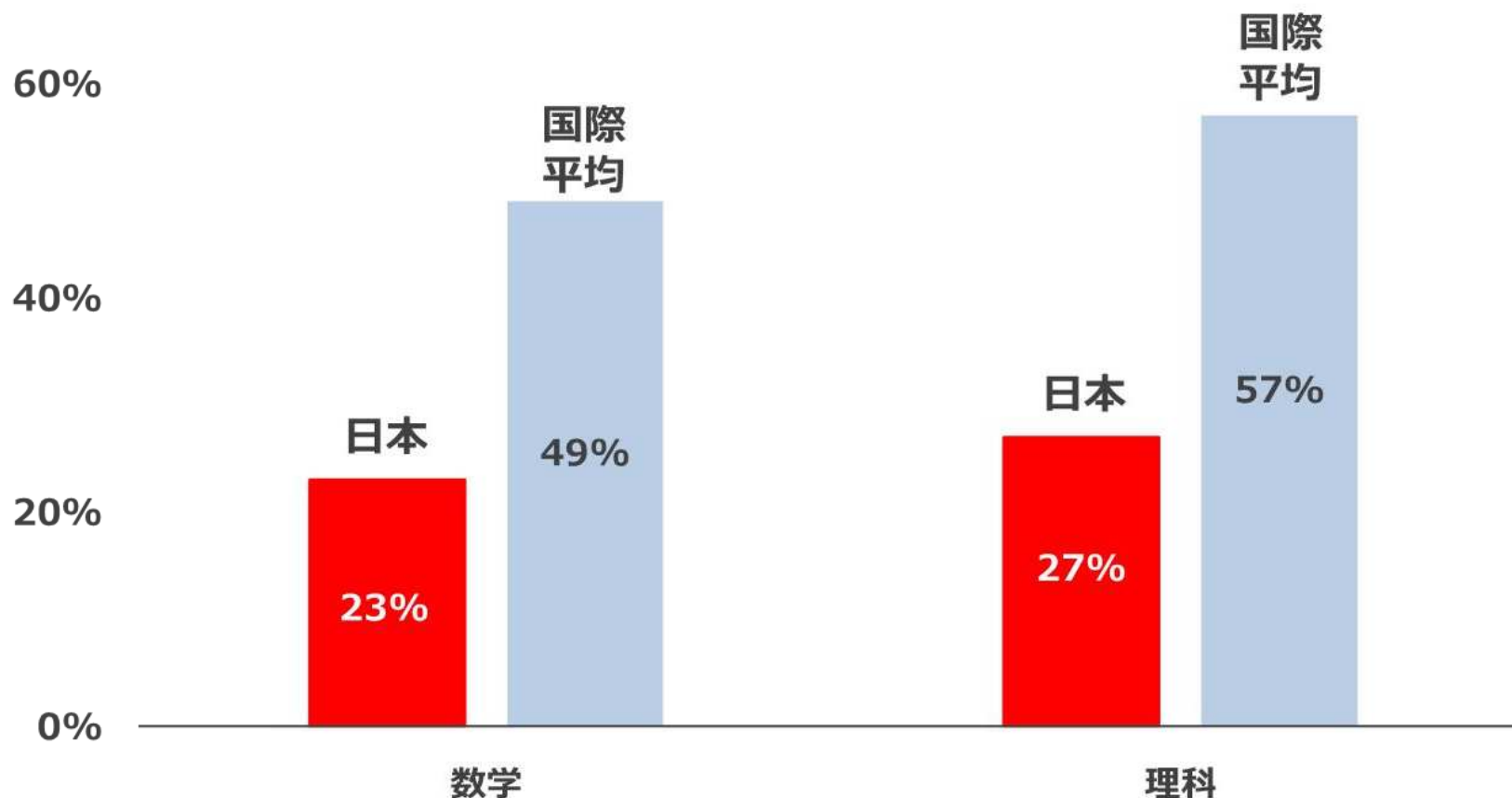
順位	国 名	平均得点
1	日本	547
2	韓国	528
3	エストニア	526
4	スイス	515
5	カナダ	511
6	オランダ	507
7	アイルランド	504
8	ベルギー	504
9	デンマーク	503
10	イギリス	500
	OECD平均	485

（注） PISAとは、義務教育終了段階の15歳の生徒が持っている知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測ることを目的とした調査。

（出所）OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2018年調査を基に経済産業省が作成したものを2022年調査結果に改変したもの。参考4－1

しかし、「数学や理科を使う職業につきたい」と思う子どもは少なく、
高い**数学的・科学的リテラシーが十分に活かされていない**。

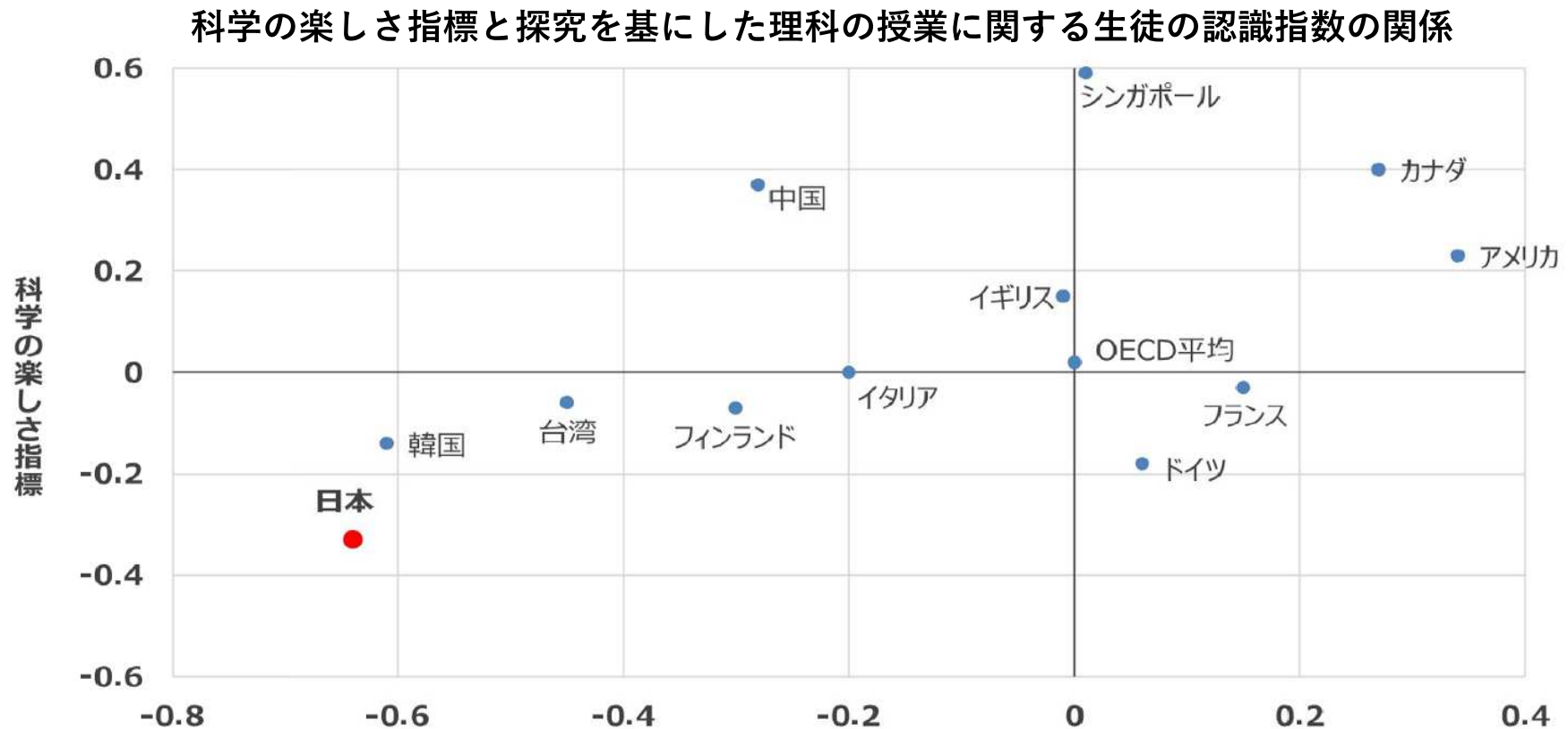
「数学」や「理科」を使うことが含まれる職業につきたい生徒（中学生）の割合



（注） TIMSSとは、国際教育到達度評価学会（IEA）が、初等中等教育段階における児童生徒の算数・数学及び理科の教育到達度を国際的な尺度によって測定し、研究することを目的に4年ごとに実施している調査。（教科調査＋質問紙調査）

（出所） TIMSS 2019年調査のポイントを基に経済産業省が作成したものを一部改変したもの。

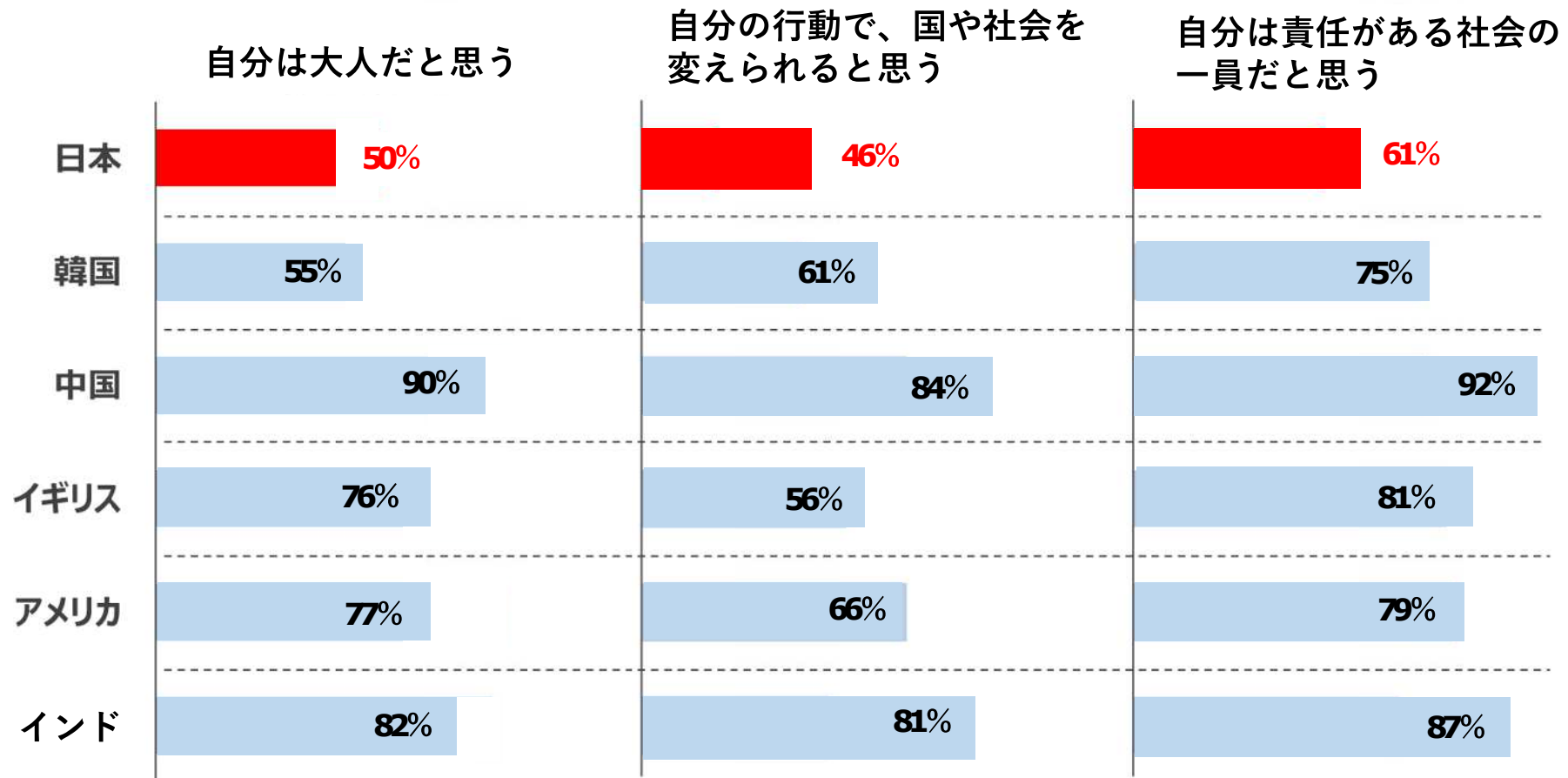
日本は、探究的な（正解のない）理科学習が少なく、
子どもたちが「科学の楽しさを感じる」機会に乏しいのではないか。



探究を基にした理科の授業に関する生徒の認識指標

- （注1）「探究を基にした理科の授業に関する生徒の認識指標」は、その値が大きいほど、生徒が理科の授業が探究を基にした授業であると認識していることを意味する。
- （注2）中国は、北京・上海・広東を指す。
- （出所）国立教育政策研究所「生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2015年調査国際結果報告書」を基に経済産業省が作成したものを一部改変したもの。

日本の18歳の「社会への当事者意識」は低い。これが実態なら、学校教育が「目指してきた理想」と「今の現実」の差をどのように埋めるのか。



（出所）日本財団「18歳意識調査第20回（国や社会に対する意識）」（2019年）を基に経済産業省が作成したものを、2024年調査結果に改変（小数第一位を四捨五入）したもの。